

コレクター福富太郎の眼

東京ステーションギャラリー 2021.04.24~06.27

「福富太郎」(1931~2018)は、1964年開催の東京オリンピック景気を背景に、全国44店舗にもものぼるキャバレーを展開して“キャバレー王”の異名をとった実業家である。その一方、少年期に興味を持った美術品蒐集に熱中し、コレクター人生にも鮮やかに展開させ、著名な作家の作品だけでなく、未評価の作品であっても、自らが良質であると信じて重要な作品を数多く収蔵した。北野恒富《道行》1913(大正2)年



近松門左衛門の戯曲「心中天網島」を題材とした作品で、悲しげな女性の表情、顔を背ける男性の仕草に、道ならぬ恋の成就を求めて死を選ぼうとする二人の決心が伺える。不穏な空気を醸し出すカラスの存在も、これから起こる悲劇を暗示しているかのようなようである。



上村松園《よそばい》



鏑木恒富《道行》



岡田三郎助《あやめの衣》

<岡田三郎助 《あやめの衣》1927年 油彩/厚紙カンバスに貼付油彩の解説>
作風の特徴は、何よりもその優美で整っていて上品な様子の女性像にある。女性特有のきめ細かくて柔らかな肌合いの表現と、洗練された装飾性を見事に結実させた作品で、池水に見立てた明るい藍地に白く浮き上がるアヤメの模様、それと帯状に配された朱紅色が美しく調和する衣が本作の主役である。